

## ❖ 『教学聖訓』

三浦梧樓院長は明治25年(1892)2月、同4年以來華族あるいは学習院に賜った勅語・令旨および国民一般に賜った勅語・詔書のうち、教学に関するものを『教学聖訓』として編纂し、全教職員・学生に配布した。

冒頭には「抑本院教学ノ標準ハ盡ク此書ノ中ニ在リ各自宜ク朝夕奉読玩味シ以テ益聖旨ヲ闡揚セン事ヲ期スヘシ」と記されている。同28年1月からは毎週月曜日の第一時限開始前に、担任教員が教育勅語を読むこととなり、のちに修身の教材としても使用され、学生は毎日持参していたという。教職員は就任時に、学生は入学式の日に院長から手渡され、女学部には同44年から配布されている。内容は同30年以後増補が施され、歴代院長によって書かれた題箋が貼られた表紙の体裁を変えながら、学生への配布は終戦まで続いた。

当館所蔵の明治、大正、昭和時代の様々な年代の『教学聖訓』は、それぞれ秩に入れられ、主に女学部のもの各自で手作りしたと思われる布袋とともに残されており、長年にわたり教学の精神が伝えられていたことがうかがえる。

(助教 谷嶋美和乃)



左上から時計回りに、M30、S17、S4、S15、S17、M25 (題箋欠) 頃のものを。(M = 明治、S = 昭和) (当館蔵)

## ❖ 『学習院初学教本』(全12巻)

学習院が独自に編纂・発行した教科書のひとつで、初等学科の国語課で用いられた読本である。凡例には「徳性ヲ涵養シ智能ヲ啓発スルヲ主トシ併セテ言語文字文章ヲ知ラシムルニ在リ」と記され、三浦院長が華族子弟の教育にあたり重視していた修身(道徳)を兼ね備えた内容となっている。編纂には学習院御用掛(のちに次長)高島信茂と初等学科の国語課教授らがあたり、明治23年(1890)から同25年まで吟味を重ねて起草したのち、学習院幹事工藤一記や教授白鳥庫吉ら中高等科教授10名による審査を経て、一之巻は同26年10月に発行、以下は翌年8月までに順次発行された。

課題は歴史・地理・理科など各教科の知識や歴史上の人物の伝記などに、修身教育の要素を織り込んでいる。歴史は神武天皇に始まり憲法発布に至るまでの事柄を述べ、地理は主に辺要の地を挙げて国の領域を明らかにし、理科では動植物の特性や効用を読物とした。各課題には関連性もたされ、例えば3巻では兎と亀の生態を紹介した後に、寓話「兎と亀」を載せている。各巻の課題から、第1課と最終課の題を挙げておく(\*は唱歌)。1巻1課「メ(目)」、2巻最終課「三千よ万\*」、3巻「けうちやう(教場)」「きるべし\*」、4巻「神武天皇」「日本男児\*」、5巻「やまとたけるのみこと」「靖国神社」、6巻「神功皇后」「我大君\*」、7巻「仁徳天皇」「五日の風\*」、8巻「八幡太郎義家」「天つ日嗣\*」、9巻「国体」「楠木正成公 二」、10巻「楠木正行公 一」「治まる御代\*」、11巻「日本刀 一」「凱旋\*」、12巻「後光明天皇」「憲法発布ノ頌」。

華族の子弟は軍人になることが奨励されていたため、勉学に励むのみではなく、外でよく遊び運動をして、強い身体を作ることも奨励されていた。右に挙げた1年級の課題はその教えが顕著なものである。本書に描かれるのは学習院の制服を着た子どもであり、学生たちは自身の行動規範としてこの教科書に接したことだろう。本書は、学習院でも国定教科書が使用される同37年まで用いられた。

(EF共同研究員 戸矢浩子)



二之巻(表紙) (当館蔵)



同左 第三十一課(部分)

### 二之巻 第三十一課

おとうと  
「兄さん、私は、おほきくなりてから、かいぐんのしくわんに、ならうと思ひます。おととさまが、かいぐんの士官になるには、舟にのることに、なれて居らなければならんとおほせられましたから、明日、すみ田川に行き、舟にのりて、あそびませう。」  
兄  
「おまへは、つねに、よくべんきやうするから、つれて行きませう。」

## ❖ 「東洋学」のはじまり — 白鳥庫吉と近衛篤磨

三浦梧樓院長の教育改革の一環として、明治23年(1890)に「東洋諸国の歴史」が開設され、白鳥庫吉(1865-1942)がこれを担当した。当時の日本には、東洋の歴史を体系的に学ぶ科目はなかったため、これがまさしく日本における「東洋史」の教育のはじまりであったといえることができる。

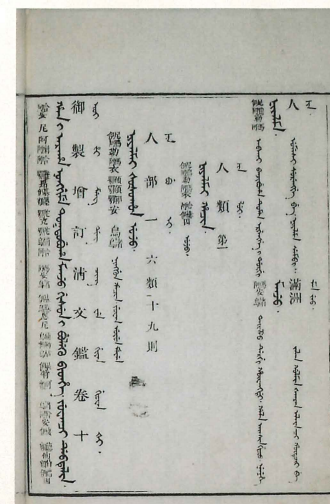
さて白鳥の関心は、中国、朝鮮のみならず、満洲、モンゴル、中央アジアなどの東洋諸民族の歴史にまで及び、これらにかんする卓越した研究成果を残した。いま学習院大学図書館には、中国清朝に刊行された『御製増訂清文鑑』という満洲語の辞典を収めるが、そこには満洲文字とアラビア文字で「白鳥」と読める朱筆のサインが残されている。このことから白鳥が、学習院において満洲語の学習にいそんでいたことが窺えるのである。

また第7代学習院長をつとめた近衛篤磨(1863-1904)は、明治30年(1897)、学生の勉学の助けとするために、近衛家のコレクションである陽明文庫のうち、漢籍を中心とする蔵書の一部を学習院の図書館に寄託した。この蔵書は、同39年頃に近衛家に返還されたが、その後も、それを収蔵するために用いられていた木箱は転用されることとなった。これらの木箱には、「陽明文庫図書」と記されたラベルが貼られたままになっており、当時の様子を垣間見ることができた。いまその木箱のひとつが当館に収められ、保存されている。

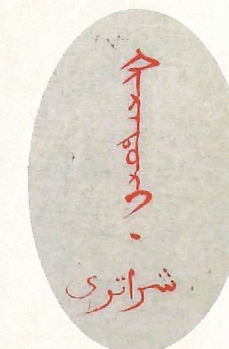
このように白鳥と近衛は、学習院における「東洋学」教育の創生と発展に、大きな役割を果たした人物といえるのである。

参考文献：学習院・永青文庫・東洋文庫編『東洋学の歩いた道』(2013年)

(客員研究員 中嶋諒)



傅恒(等)奉勅撰『御製増訂清文鑑』(部分) 中国 清時代 光緒25年(1899) [学習院大学図書館蔵]



巻九表紙見返しより白鳥庫吉署名 (上は満洲文字、下はアラビア文字)



木箱・ラベル 明治30年(1897)頃 (当館蔵)



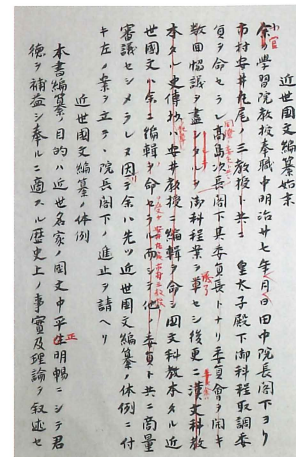
ラベルの拡大写真

## ❖ 萩野由之博士史料

萩野由之(1860-1924)は、明治期から大正期にかけて活躍した国史学者、国文学者で、明治25年(1892)より学習院教授をつとめた。同27年には、明宮嘉仁親王(のちの大正天皇)のために『近世国文』を編纂し、これはまた学習院の学生のための教科書としても用いられることとなった。

現在、萩野の蔵書の多くは、九州大学附属図書館などに収められるが、萩野の死後も長く子孫の邸宅に保管され続けた史料が、いま「萩野由之博士史料」として当館に収蔵されている。そこには「近世国文編纂始末」と題する書きつけなど、学習院の教育の歴史を知るうえで有益な資料も多く含まれている。

(客員研究員 中嶋諒)



萩野由之「近世国文編纂始末」(部分) 明治29年(1896) (当館蔵)